シンポジウム 喘 息

(8) 予定発言 気管支喘息の心身医学

九州大学医学部心療内科教授

池 見 酉 次 郎

SYMPOSIUM ON ASTHMA. PSYCHOSOMATIC ASPECTS OF ASTHMATIC ATTACK

Yujiro IKEMI, M.D.

Professor of Department of Psychosomatic Medicine, Kyushu University School of Medicine

気管支ぜんそくの発生や経過にたいする精神的な因子の役割についての考察は、今日までのところ、一般的に概念的、抽象的なものが多く、臨床の実際に直結しかねるうらみがある。そこで今回は、心理的因子がぜんそくの自覚的な呼吸困難に、どのような影響を持つものであるかを、二、三の実験的、臨床的観察をもとにして申し述べてい。

1. まず、心理的な処理が、呼吸困難の経過に好影響を及ぼす機転として重要なものは、心身の弛緩である。ぜんそく患者にみられる慢性の不安緊張状態が、気管支の過敏性を高め、発作準備状態を作り、一たん発生した発作を増悪せしめることは、普通に考えられているところである。この意味において、心身の弛緩をはかる療法（催眠療法、自律訓練法、精神安定薬など）が、呼吸困難の治療に効果的となるわけである。

さらに教室では、患者の前胸部にimpedance flowmeterをあて、その振幅を測定することによって、肺血流量の間接的な示標の一つとしている。これについては、動物に実験的な気胸を作ると、flowmeterの振幅が、明らかに抑制されることを確かめている。一般に、心理的ストレスによつて、喘鳴がおこつた時、振幅が減少し、気管支拡張

薬、心理療法などで、発作が軽快すると、振幅が増高する傾向がみられる。教室で、ぜんそく患者に自律訓練法を実施させた結果、これがうまく行なえた例では振幅が増加した。また、二、三の症例で、自律訓練法によつて、振幅が増高したところで、発作発現の自己暗示を与え、呼吸困難感を訴えるにつれて、振幅が減少することも観察されている。さらに24例のぜんそく以外の患者や健康者を催眠状態に導入して、impedance flowmeterによる測定を行なつた結果、導入によつて、心身のくつろぎがえられた18例のほとんど全例に振幅の増加がみられた。

今日一般に、催眠療法だけでは効果がないこと、あつても一時的であることが指摘されている。それは、むしろ当然のことであつて、以上のような意味における弛緩療法は、あくまで、補助療法の一つである。また暗示などによつてえられた、一時的な弛緩だけでは目的を達せず、自律訓練法などによつて、たえず、自己弛緩を深めてゆくこと、心理療法による精神生活の一般的な安定をはかることなどによつて有効に作用するものと思われる。

次に、呼吸困難の発生における自己暗示的な条件づけの果す役割を端的に示す実験を行なつた。

対照液をハウスダストと暗示して、吸入させただけで、1秒率の著明な低下をきたしたもの(7例)、ハウスダストを吸入させても、それはぜんそく薬だと暗示することによつて、発作の発生がおさえられたもの(7例)、これら2種類の暗示が、いずれも有効に作用したもの(3例)をあわせると、被験者(ぜんそく患者)23例中17例において、暗示効果が陽性に認められた。しかも、ハウスダストにたいする過敏性の明らかな8例中6例においても、暗示効果が現われた。

今日心理学的に知られていることは、催眠性トランスなどのような、心身の統一、注意集中の状態では、条件づけや、条件づけの修正が正常覚醒時よりも、速やかにかつ強力に行なわれるということである。したがつて、上記のような自己暗示的な条件づけを、より有利な方向に修正せしめるための催眠療法的な操作が、ぜんそく治療の有力な武器の一つとなりうるわけである。

第3に、ぜんそくの経過に、最も重大な意味をもつ心理的因子は、その療養態度や療養条件を左右する患者の性格傾向や心理的環境である。副腎皮

質ホルモン依存性のぜんそく患者で、内分泌学的には、ほぼ等しい条件下にある、19人の患者について、ステロイドの離脱を試みた結果、次のような成績がえられた。離脱が比較的容易に運んだ群と、離脱が困難であつた群について比較すると、後者の方が性格的に依存性の強いものが多く、また、情緒不安定、社会的不適応、内向的な抑圧傾向、心理的な環境の悪条件なども明らかに後者に多くみられた。この成績は、副腎皮質ホルモンの離脱にさいしても、患者の身体的条件のみならず、その性格、心理的な環境などについての合理的な分析と処理が、いかに重要なものであるかを示唆するものと思われる。

以上述べたような、心身の弛緩、条件づけの修正、性格傾向や心理的環境の分析とその処理という、より具体的、かつ謙虚な立場から、心理的因子にたいする正しい配慮を、ぜんそくの呼吸困難の診断や処理に活用するとき、ぜんそくの心身医学は、次第に実地臨床に定着してくるものと思われる。

(協同研究者：吾郷 晋浩、高橋 宜生、近藤 寛治)